

KSCA 会報

Vol.12 2012.2.20

目次

PAGE 1-PAGE 7

(1) 日本心理臨床学会第30回秋季大会
自主シンポジウムのご報告

PAGE 8

(2) 「SCに必要なこと」
名古屋外国語大学・名古屋学芸大学
保健管理センター学生相談室
清水岳彦
(元横浜市・川崎市SC)

PAGE 8

(3) 連絡先

(1) 日本心理臨床学会第30回秋季大会 自主シンポジウムのご報告

2011年9月2日（金）18:00~20:00

九州大学箱崎文系キャンパス

講義棟101

「スクールカウンセラーに必要な資質とは（4）一スクールカウンセラーとしての「得意技」形成プロセス」

企画・司会者：林 幹夫（神奈川県SC）

話題提供者：白石泰夫（神奈川県SC）

大田隆人（神奈川県SC）

齋藤 梓（神奈川県SC）

指定討論者：宮森孝史（東海大学）

小林正稔（神奈川県立保健福祉大学）

【企画概要】：NPO法人神奈川県スクールカウンセラー協会（KSCA）は、毎年自主シンポジウムで、スクールカウンセラー（以下SC）に必要な資質について、様々な観点から検討を行っている。今回の観点は「得意技」である。SCには標準的な能力が必要だが、そこから先は、各自の専門性に負うところが大きい。各自の専門性、いわば「得意技」を共有して切磋琢磨することが、今後のSCの資質を高めるために必要とされるのではないだろうか。白石は「発達障害」について、児童・生徒と興味・関心が通じるところがあり、彼らの得意な分野で共通の話題が多く、その話題を通じて学校生活に関わっている。言葉での関わりに緊張の強いケースに対して、手芸などを一緒にしながら面接につなげ、他の生徒も交えての作業を通じて達成感を得る援助をしていくというやり方を身に付けている。

大田は「不登校」について、関係作りの家庭訪問や見立てのための家庭訪問、登校のチャンス待つ家庭訪問、登校刺激を与える家庭訪問、親のための家庭訪問など、ケースによって使い分けてい

る。

齋藤は「トラウマ」について、保護者の自死、犯罪被害への遭遇、虐待など何らかのトラウマティックな体験を持つ生徒に対応する場合がある。現在、トラウマやPTSDの支援に携わっているため、スクールカウンセリングにおけるトラウマ対応という観点から発表を行う。

本シンポジウムではこれらの「得意技」を話題提供とし、SCに対する関心が高いフロアの方々とともに、SCに必要な資質について検討し、議論を深めていきたい。

【大田】：効果的な家庭訪問について

- I. 家庭訪問が必要なとき
- II. 不登校のタイプによる家庭訪問のタイミング
- III. 家庭訪問の目的
- IV. 誰が家庭訪問に行くか
- V. 最後に

I. 家庭訪問が必要なとき

①どの時点で家庭訪問に行ったらいいのか

欠席し始めた生徒とコミュニケーションをとる方法は、電話、メール、手紙等色々ありますが、「一定期間」欠席が続いた時は、実際に本人と顔をあわせて話をするのが再登校に向けて力強い第一歩となります。

その「一定期間」がどのくらいかというのは、その生徒の状況、今までの経緯によって様々です。3日休んだら家庭訪問と決まっている学校もありますし、「何だかんだで2ヶ月欠席が続いてしまったので、そろそろ・・・」ということも珍しくありません。

日々輝学園に入学してくる生徒は、小中学校で不登校を経験している生徒が多いので、多少学校を休んでも親子共に動じないことが多

いですが、さすがに2週間くらい続けて学校を休むと、「またか・・・」、「もう無理かも・・・」と、親や子どももそれなりのストレスや葛藤が生じ、それが各家庭特有の悪循環を惹き起こし、ますます登校できなくなってくるという状態に繋がる恐れがあります。

②家庭訪問による影響

その悪循環を起こさせないようにするためには、家庭訪問が有効です。そして、その影響が一番顕著に現れるのは保護者だと思えます。もちろんそれまでに電話や面談で保護者の方と話す機会があるとは思いますが、やはり「学校の先生が直接子どもに会いに来てくれた」という安心感は大きいですし、保護者と学校の信頼関係が強まり、間接的に子どもに対してもよい影響が生まれます。

以前学園で行ったアンケート調査でも、保護者（特に母親）が学校に期待することとして、「子どもに登校刺激を与えずに、子どもの話を聞いてもらいたい」という思いが強く表れていました。多くの家庭では、親が「何か嫌なことがあるの？」と聞いても、子どもは「別に・・・」とか、黙って部屋を出て行ってしまうことが多く、子どもが何を考えているのか分からず、手の打ちようがない、八方ふさがりで困っていることが多いようです。

そこに家族以外の第三者として教師やカウンセラーが家庭の中に入り込むことによって、すぐに話ができるわけではありませんが、親よりは余裕を持って子どもと接することで関係作りが進み、他愛のない話の中から、欠席につながっている本質的な話が聞けるようになることが多くあります。

それによって保護者も子どもの本音が見えてきて安心し、余裕を持って子どもと接することができ、安定した親子関係を取り戻せることがあります。

③子どもへの影響

もちろん直接子どもに対しても大きな影響があります。プラスの影響もありますし、マイナスの影響もあるので注意が必要です。

Aプラスの影響

- a.先生がわざわざ家まで来てくれることで、「まだ忘れられてなかったんだ」と安心する。
- b.配付物をもらいながらクラスの出来事の話聞くことで学校の様子が分かって安心したり、学校に興味を持ったりする
- c.休んで学習の遅れを気にしている子どもが勉強を教えてもらうことで自信がついて、登校意欲が湧いてくる。
- d.継続して会うことで子どもと教師の関係が深まり、学校に対して抱いていた不安が軽減される。（「この先生がいてくれるなら頑張ってみようかな」という気になる）
- e.まだ引きこもりの生徒で、家庭訪問して本人と会えなくても、教師が保護者と話して帰ってくるだけで、家庭の中に学校の空気を置いて来ることができ、本人に刺激を与えられる。

Bマイナスの影響

- a.先生がわざわざ家まで来ることで、ゆっくり休めなくなってしまう。
- b.学校の様子やクラスの話聞くことで、今の自分と対比してしまい、ますます世の中から取り残された感じを持つてしまう。
- c.勉強にコンプレックスを持っている生徒に補習の課題を渡すことで、ますます行く気を失わせてしまう。
- d.頻繁に家庭訪問しすぎることで、親子共に焦らせてしまう。
- e.最後の逃げ場所としての家庭・部屋に教師が来ることで、追いつめられた感が高まってしまう。

このように、家庭訪問は諸刃の剣なので、ケースの見立てがとくに重要です。

II. 不登校のタイプによる家庭訪問のタイミング（登校できそうな見込みがない状態のときに・・・）

①よい子の息切れ型

このタイプの生徒は、休んでいることに罪悪感を抱いているので、あまり早い時期に家庭訪問をしてしまうと、「無理してでも学校に行かなければ」と葛藤を強めてしまうので注意が必要です。目安としては、毎朝玄関で固まるような状態が見られなくなったり、「行かなきゃいけないけど行けない・・・」という葛藤の様子が少なくなってきた頃に、『休んでいても心配しないでね』という意味を込めて、顔を見に行く程度の家庭訪問から始めるのがよいようです。

このタイプは特に、本人の承諾を得てから家庭訪問を行うということが必須です。承諾してくれた場合でも、『もし会いづらかったら無理に会う必要はないからね』と、会わない自由を保障してあげる必要があります。

もし本人が拒否した場合、もう少し様子を見るのが賢明ですが、進級に向けてのタイミングなど、定期的に余裕のない時は、『お母さんと会うだけならいいか?』、『配布物をポストに入れておくだけならいいか?』程度に粘ってみることは構わないと思います。

②無気力型

このタイプの多くの生徒は、登校することにも休むことにも特に意味を見いだしていません。教師が本気になれば、「しょうがないなあ・・・」という感じで、ギリギリに動き始めることが多いので、家庭訪問しないケースも多いのではないのでしょうか。

このタイプの生徒には、価値観の変容を図るための心を揺さぶるような働きかけが必要なので、頻繁に様々なコミュニケーションをとって、色々な体験を積み重ねていく必要があります。

③怠学型・非行型

このタイプの場合は、保護者が多忙で子どもと関われなかったり、放任主義だったり、親子の主従関係が逆転してしまっている場

合が多いのではないかと思います。また、生徒自身も、将来に対して投げやりになっていたり、高校を卒業することに意味を見いだしていないことが多いようです。

色々な状況を考慮して、『それでも何とか卒業を目指すべきだ』ということになった場合、まずは関係作りのために家庭訪問が必要です。継続的に本人と会って、雑談をし、徐々に本人が学校のことを気にするような発言が出てきたら、「君がその気にさえなれば、今からでも充分間に合う。もし、その気なら、先生はどんな協力も惜しまないよ」という流れで、あくまでも本人に主体性を持たせ、『君が進級したいと言うので先生は協力しているんだよ。』というスタンスを崩さずに関わっていくことが必要でしょう。

現実的にどの程度登校できるか、本人もやってみないと分からないところもあると思うので、最初は目標を達成できないことも多いかと思いますが、そのときは再び家庭訪問して、『じゃあ現実的にはどの程度できるか』という話し合いを根気強く重ねる必要があるようです。

④発達障害型

アスペルガーや高機能自閉症の生徒が休みはじめた場合は、基本的に学校には行かなければいけないという真面目な生徒が多いと思うので、校内の環境調整をしてあげれば登校できることが多いと思います。それでも欠席が続くようであれば家庭訪問し、顔を合わせながら粘り強く不安を解消してあげることが必要です。さらにそれでも登校できないときは、それまでに学校で様々な傷つく体験を重ねている結果であると思われるので、これ以上人嫌いにならないようにすることを第一の目的とし、対応を考えていく必要があると思います。

知的な遅れのある生徒が休み続けている場合は、勉強に対するコンプレックスを抱えていることが多いので、この場合もやはり校内の環境調整で登校できることが多いようです。それでも登校できないときは家庭訪問を行い、何に対して不安を抱えているのかを探る必要があるでしょう。

ADHDの生徒が休み続けている場合は、興味関心が学校以外のものに移ってしまっていることが多いので、③怠学型・非行型に準じた対応が有効だと思います。

⑤精神障害型

医師の判断で休ませていることも多いと思いますので、登校を目的とした家庭訪問ではなく、「学校はあなたのことを忘れてないよ。焦らずにゆっくり治していこうね。」という目的の家庭訪問を行うと、本人はもとより、保護者が安心すると思います。場合によっては、家で学習を進めることもあると思います。その際は家庭訪問して、学習指導をすることも必要でしょう。

⑥一過性型

何か明確な理由があって休んでいると思うので、その原因に対す

る不安が和らげば登校できるはずですが、それでも登校できず、長期化した場合は、今まで述べた①～⑤の中のどれかに準じた対応が必要と思われます。

III. 家庭訪問の目的

今までにもいくつか述べましたが、もう一度整理してみます。生徒によって目的は異なりますので、色々と挙げてみます。

①本人を安心させる。

生徒が休んでいて、勉強の遅れや進級について心配している場合、「まだまだ大丈夫だから」と安心させます。

②保護者を安心させる。

家庭訪問以前に面談を行うケースが多いですが、欠席が長引いた場合、子どもと同様、進級・進路について心配している保護者が多いと思います。また、子どもとコミュニケーションを取れないでいる親も多いので、教師が子どもと話をすることで安心するようです。色々なことで保護者が不安になっていることが多いので、教師が保護者と話すことで、保護者のガス抜きができて、子どもにも良い影響を与えられます。

③本人がよそに向けている関心を再び学校に向けるようにさせる。

「高校の先生がわざわざ家まで来た！」というインパクトを利用して、本人を「ハッ!!」とさせます。

④子育てに無関心な親を刺激して、子どもの将来に関心を持ってもらう。

③と同様、親に「ハッ!!」としてもらう。

⑤のんびりしすぎている生徒に対して、現実を突きつける。

③と似ていますが、インパクトが伝わらない生徒には、このままでは進級が難しいという話をします。

⑥家庭の様子が今ひとつ分からないときに、実際に行ってみる。

電話で色々話し、いろんな策を取ってみてもうまくいかないと、実際に家庭の中を見てみると生活の状況がよく分かり、新たな対応策が生まれます。

⑦定期的に訪問して、本人と関係作り。

登校までに時間がかかりそうな場合は、少なくとも月に2回くらいは家庭訪問し、本人と仲良くなることを目的とします。学校の話をするかしないかは、本人がどれくらいの葛藤状態にあるかによって判断します。

⑧無気力な生徒に刺激を与える。

③と同様のインパクトに加えて、無気力な状態に対して心を揺さぶる働きかけを行います。一緒に遊びに行ったり、衝撃的な映画(?)を観たり等。

⑨学習指導

家で何らかの学習を進めていくことになった場合、基本的には保護者に指導してもらうことが多いと思いますが、モチベーションを維持するためにも、時々訪問するのが理想的です。

⑩本人が会ってくれなくても、学校の空気を置いてくる。

本人が会いたがらないことも多いと思います。「親と話だけでもいい」という場合は、親と話をしに行くだけでも意味があります。何度も学校で保護者面談を行っていても、家で話をするということに意味があります。教師が帰った後に本人がどのような反応を示したかがポイントです。どんな話をしたか興味を示した場合は、会える日も近いでしょう。無関心を装っている場合は、時間がかかるかもしれませんが、訪問し続けても大丈夫でしょう。イライラしたりしていた場合は、少し様子を見た方がよいでしょう。

⑪本人、保護者とも、なかなか連絡が取れないときに、訪問してとりあえず状況を確認する。

連絡が取れるまで待っていると、あっという間に1ヶ月、2ヶ月が経ってしまいます。本人も保護者も学校から気持ちが離れてしまい、退学してしまう場合もあるので、留守番電話にメッセージを入れても返事が来ないような場合は、とにかく家まで行ってみて、会えない場合でも手紙を残してきます。会えた場合は、今後確実に連絡が取れる方法を確認します。

⑫そろそろ登校できそうな生徒へのきっかけ作り。

久しぶりに学校に行ったときの具体的なイメージ作りを一緒にします。何時頃に家を出るかが決まったら、何時頃に学校に着いて、その時学校の中は休み時間だから生徒がいっぱいいるけどどう？じゃあそのまま職員室に行って、「〇年〇組の●●ですけど××先生いますか？」って言える？等々、時系列に沿って、具体的に登校したときの行動を決めておきます。「学校に行ったらこうすればいいんだ」と思えると本人も安心できます。

久しぶりに登校したときに何か課題をやって帰るのか、とりあえず行くので精一杯だから、簡単に話をして帰るのか。課題をやるならどこで何をどの程度やるのか。本人が、「その時の気分で決めます」と言うのであればそれで構いません。

IV. 誰が家庭訪問に行くか

訪問する人の立場によって、どのような影響の違いが考えられるでしょうか。

①担任

担任が訪問すると、どんなに登校刺激を与えないように注意していても、やはり本人や保護者はプレッシャーを感じてしまうものです。しかし、担任が行かざるを得ない場合も多いと思うので、そういう事実を忘れずに、言動に気をつけてもらいます。

逆に、登校刺激を与えたい場合は、絶好の立場ですので、その立場を最大限活かした訪問をしてもらいます。

②カウンセラー

登校刺激を与えたくないときや、1年生で生徒の状況がまだよくわからないときに効果的です。まだ状況のよくわからない生徒と継続的に会い、関係作りをしながら見立てを行います。

見立てができて、担任にシフトした方がよいときは、担任にシフトします。

③学年主任

担任と訪問して、役割分担できるのがメリットです。現実を突きつけなければいけないときに、学年主任が厳しい話をして、担任がフォローすると効果的でしょう。また、突然学年主任だけが訪ねてくるというのもインパクトがあるかもしれません。

④部活の顧問

それまでに生徒との関係ができている場合が多いので、はじめから踏み込んだ話ができるでしょう。また、学年も違ったりと、第三者的な立場から話をするので、余裕をもって接することができるというメリットもあります。

⑤養護教諭

保健室を頻繁に訪れていた生徒の場合、養護教諭だけにいろいろ話をしていることも多いので、再び保健室登校につながるきっかけになるでしょう。

V. 最後に

いろいろな不登校生徒と接してきましたが、中にはなかなか状況が変化せず、登校に結びつかない生徒もいました。その生徒が全員そうという訳ではありませんが、なかなかうまく思い通りにいかないことを親のせいにしたり学校のせいにしている生徒は、状況が変化せずに、不登校状態が長引いているように思います。「やっぱり自分が何とかしなきゃいけないんだ...」と多少なりとも腹を決められた生徒は、少しずつ事態が動いていきます。なかなか動きがない難しいケースでも、生徒にそういう心境になってもらうための一つの手段として、淡々と家庭訪問を続けることがあります。

今後の課題としては、そうやって淡々と家庭訪問して、「自分次第！」という心境に行き着いても難しいのが「学校嫌いのアスペルガーの生徒達」という実感があるので、そのアプローチを考えていきたいと思っています。

【白石】：

1. SCとしてどんな仕事をしているか

報告者はSCとして勤務を始めて10年ほどですが、当初は不登校中心だった業務が近年は「特別支援」に関連する相談が増え、業務の半数以上を占めています。

また、以前は相談室を拠点とした面接中心の仕事でしたが、近年は職員室を拠点とし教室や保健室、適応指導教室を巡回、「その合間に」面接業務を行うという形になっています。

A.職員室の仕事

報告者は、登校すると職員室を一巡して一週間の学校・生徒の様子を聞いて回ります。正式な会議やケース会と異なり、職員室での雑談めいた話題では職員の生の不満や愚痴、反論が出てきやすく、より踏み込んだ話ができるように感じます。

また、授業で起きた「生徒の面白いエピソード」が生徒の状況を把握する手掛かりになるケースもあります。「担任の冗談に一人だけ笑わなかった生徒」の受け答えの様子を聴き、気になって他の情報も確認すると発達障害傾向が確認できたというような事がありました。

B.教室巡回・保健室巡回

面接や会議の時間までは、小学校でも中学校でも校内を歩き回り、生徒の様子を見に行きます。小学校では担任の空き時間が少ないので授業見学の合間にこちらの見立てやアドバイスを伝えることもあります。また学校によっては支援対象の生徒の学習の手伝いを依頼されることも多いです。

中学ではSCが巡回する事が生徒にどうみられるかという懸念もありましたが、長期の勤務校では小学校から顔見知りの生徒も多く、比較的気軽に巡回できています。

C.適応指導教室訪問

勤務学区の適応指導教室では昨年から「手芸教室」を月1回程度開催し、「手芸の講師」の名目で手芸の作業の説明を介し、生徒の近況を聞き、必要に応じて見立てを行っています。特に女子生徒の場合は男性のSCに緊張を強くする場合も多いのですが、「作業内容優先」で関わるうちに徐々に自発的な話しかけも増えてきました。

D.面接

保護者面接でも、最近は特別支援に関連する相談が増えています。現実問題として適切な専門機関の利用や学校場面での支援の方針を決定することが先決なので数回の面接で方針をある程度決定し、以降は相談というよりは経過の確認が主となります。また、面接の枠組みも教員同席の話し合いになることも視野に置いた緩やかなものとしています。

生徒面接などでもそうですが、教員や養護教諭など、複数が関わることを念頭に置いた面接を心がけ、いわゆる「セラピー」的な意図を持つ面接はめったに行わないのが現状です。

2.SC業務に用いる「得意技」- 報告者の場合

A.アセスメント知識の活用

SC業務の中では医療機関や他の専門機関が関わっているケースに関わることも多く、しばしば学校場面での対応に医療や福祉分野の専門知識が要求される場合があります。

また、それらのケースには各種心理検査が実施されている場合も多く生徒対応の重要な資料となるのですが、「診断用」の検査報告が

そのままでは学校場面に応用しづらい場合もあります。報告者は保護者の了承を得て資料を借り受け、それを基に学校と保護者に「学校用」の読み解きをし、必要な関わりの提案を行うことがあります。

また、学校訪問や教室巡回の際に生徒の絵や作文などの作品を観察し、気になる生徒について担任と話し合うこともあります。

B.雑談の引き出し

SCが関わりを依頼される生徒は、マンガやアニメ、また動物や植物・昆虫などに非常に詳しい場合があります。また、対人コミュニケーションの問題を指摘されるケースのはしばしば自分の興味・関心のある話題を一方的に語り、周囲から敬遠されています。

彼らが教員から「相談に行くように」と促されても中学生ぐらいだと不信感・警戒心が強くなかなか話が進まないものですが、彼らの「どうせこんな話をしたって通じるわけがない」と思うような話を分かってみせるとそれがきっかけとなって関われるようになる場合があります。直接「面接」と言う形にならなくても自分の好きな話題を目一杯話し、スッキリして下校、と言う形の関わりを続け、学校へつながったケースもあります。

C.手芸や手芸作品の活用

小学校高学年から中学生ぐらいの女子生徒には男性のSCが関わるのが難しいこともありますが、報告者の作った手芸作品に関わるきっかけとして利用する場合があります。自己表現の苦手な生徒に作業の説明を通じてやり取りができるようになる場合がありますし、また自己評価の低い生徒でも仕上げた作品が「眼に見える成果」として自己評価を高めるきっかけ、友人と関わる手立てとなる場合があります。

3.「得意技」形成のプロセス- どうしてこういうやり方を身につけたか?

A.精神科勤務の経験

報告者は大学院修了後、精神科単科の病院に就職しました。そこでは心理検査のオーダーが非常に多く、一日の業務が検査と報告書の作成で終わってしまうことが続きました。病棟のスタッフは日々の仕事に追われていますし、そんな中で「心理士」が自分の(終始レベルの知識・経験の)ペースで関わることは業務の停滞にもなりかねません。就職時に前任スタッフが自分の枠を固持する事で他職種とトラブルになる場合もあったと伝えられ、動きには慎重さが要求されました。

そういった中で心理士の「居場所」を作るために先輩の心理士と相談して行ったことが、それまでは看護スタッフにただ受け取ってもらっていた心理検査を直接病棟に持参し、手の空いているスタッフに渡しつつ、口頭で結果の説明をすることでした。ただ検査報告に目を通してもらうのと違って、その場で実際の病棟での様子と付き合わせた話ができることで看護スタッフが検査の結果をより活用しやすくなるメリットもありましたし、やり取りの中で看護スタッフ

に「愚痴」を吐き出してもらうことも患者理解とスタッフの「労い」のために有効だったようです。

病院での心理士による収入は「保険点数上の計算」からは必ずしも給与に見合うものにならない場合も多いはずですが、こういった関わりから心理士の価値を見出してもらうきっかけともなるようでした。

B.思春期病棟・思春期外来の経験

報告者が勤務を始めてしばらく後、主治医から診察を終えた不登校中高生の「息抜き」に付き合うように指示がありました。当初は院内の体育施設を借り、1対1で卓球などを行っていましたが、来院する中高生の数が増えるに従い軽スポーツやゲーム等をメインとするグループになっていきました。治療や面接への動機付けの低いケースに対してもスポーツやゲームを通じて気持ちを聞いたり、関わり方のアドバイスをする機会にできるようになって行きました。当時の臨床経験の少ない報告者には先輩心理士のような適切な関わりはできませんでしたが、彼らの趣味や興味に関わる役割を果たせました。

また、同時期に摂食障害などで入院している比較的若い女性患者が入院時間をもてあましているとの相談を病棟スタッフより受け、女性心理士主体で手芸のグループを行うようになりました。摂食障害のケースでは手芸に没頭することで「食べもののこと」を考えなくて済むようでしたし、作品をバザーで販売したり院内に飾ってもらうことが肯定的な自己評価につながることもあるようでした。

C.それらの経験より学んだこと

報告者は上記の経験からSC就任当時から他業務の枠を尊重し、連携を重視し、その中で動く心構えとオーソドックスな面接技法は尊重しつつ、周囲のニーズを「心理業務」につなげていく工夫を心がけていました。

報告者がSC業務に初めて就いたのは全国配置が開始されたごく初期で、まだSCがどう動くべきか流動的だった時期ですが、その際にあまり「臨床業務の枠組み」にこだわらず、学校側のニーズに合わせて動くように心がけた事は間違いではなかったと思っています。

ただし、そうは言っても例えば周囲との連携を重視する関わり方が他のスタッフ（学校では教員）の力量に依存しすぎているように感じることもありますし、解決・連携優先の関わりや手芸等の媒介を安易に使って保護者や児童の気持ちに寄り添う時間を軽視したり「間がもたない状況」を味わいにくくしていないか？とも感じているのですが。

【齋藤】：今回の自主シンポのテーマは、スクールカウンセラーとして得意技をどう形成したか、というものでした。得意技、とは何でしょうか。テーマにそって改めて考えてみると、得意技というのは、スクールカウンセラーとしての平常時の業務や、そこで求められる知識や技術に加えた、プラスアルファの知識や経験、技術のことではないかと考えました。そしてそうであるならば、得意技と

いうと違和感はあるかもしれませんが、私にとってプラスアルファの技術とは、トラウマ（心的外傷）に関すること、そして犯罪等の被害を受けた場合の対応ではないかと思われました。この場合のトラウマ（心的外傷）体験とは、人為災害、自然災害、戦争、重度事故、犯罪被害、性暴力、虐待、暴力的死別体験などの、生命や身体的保全の危機に瀕する、或いは目撃する、親しい人がそういった危機に遭うといった体験を意味します。

なぜ、トラウマへの対応がプラスアルファとなりえるのか。私がトラウマ対応の知識や技術を獲得していったプロセスには、3つのポイントがあります。1つ目のポイントは、スクールカウンセラーとして勤務していた学校や地域の特性、風土です。私の勤務校及びその地域は、比較的、虐待の疑われる事例や暴力被害、性暴力被害等が多い傾向にありました。そのため、勤務が始まってしばらくし、トラウマに関する知識を身につける必要を痛切に感じました。2つ目のポイントは、スクールカウンセラー以外の勤務で習得した知識と技術、経験です。私は、スクールカウンセラー以外にも、PTSDの専門治療、犯罪被害者の精神的支援、危機介入などに携わっていました。そのため、そういった業務の中で、トラウマ臨床に関する知識や経験を積んでいたということがあります。3つ目のポイントとしては、スクールカウンセラーをしている皆様が体験されていることだと思われませんが、学校現場では次々とトラウマに関連する問題が発生します。生徒同士或いは見知らぬ人からの暴行、肉親の自死、虐待、性被害、友人の死など、学校現場で発生する危機的状況は様々です。スクールカウンセラーは、日々そういった問題に対応していくこととなります。もともとの特性や風土からトラウマに関する知識を身につける必要性を感じ、スクールカウンセラー以外の業務でトラウマ臨床に関わる機会を得、実際の学校場面でも次々と対応を迫られる場面を経験する、そういった状況から、トラウマへの対応が身に付いていったのではないかと考えられます。

しかし、はじめ、私は学校現場におけるトラウマへの対応に関して、一つの問題に突き当たりました。それは、自分が他の勤務で得た知識や経験を、学校現場で行う対応とすり合わせることの難しさです。他の勤務では、トラウマ体験をした人に個別に対応することが主でした。しかし学校では、集団を扱わなければなりません。この違いが第一に難しく感じられました。また、他の勤務では、病院や警察、検察、弁護士等、紹介できる専門機関が多く存在します。しかし私の勤務校の周辺には、紹介できる専門機関はあまり多くありませんでした。さらに、トラウマへの対応が専門である機関では、他の専門職もトラウマに関する知識を多く持っています。しかし学校現場では、教員は必ずしもそういった知識を持っているわけではありません。このように、他の勤務で得た知識や経験を、学校現場で活用するためには、幾つかの困難な点、限界点が存在しました。けれど一方で、私は、可能性も感じていました。学校は、子どもたちにとって守られた世界であり、日々生活する場所です。教員たちは生徒に毎日関わっています。この学校という場面で、何らかのトラウマ体験に遭遇した子どもたちを支えられるならば、それは

非常に心強いことであると感じたのです。

従って、大切なことは、他の勤務で得たトラウマの専門知識や技術を、違いや限界を踏まえたうえで、どのように学校の現場で活用していくか考えることだと思いました。

私はまず、別の勤務先と学校現場との共通点を考えました。スクールカウンセラーは、他職種が多勢である中で働く職業です。そのため、他職種に自分の業務や臨床心理の視点について伝える、説明するという技術には長けているはずです。また、教員と共に働かなければ業務が成り立たないため、他職種と協同することにも慣れているはずです。こうした他職種への説明、協同という点は、別の勤務先でも同様であり、共通点であると思われました。さらに学校現場の特性と利点としては、前述した、生徒の日常生活を支えることができるという点、教員が密に生徒に関わることができるという点があげられます。

さらに私は、「視点の転換」ということに思い至りました。私は、別の勤務先で小中学生の被害者に対応する際に、その被害者の通う学校のスクールカウンセラーや教員とケース会議を持つことができました。その際に、学校やスクールカウンセラーがここまで動いてくれると有難い、このように役割分担ができると有難い、と思うこともありました。そこで、気が付いたのです。視点をひっくり返せばよいのだ、と。外部の心理士として、スクールカウンセラーがどう動くかと有難いのか。その自分の考えを、そのまま、スクールカウンセラーとしての自分に当てはめればよいのです。そうすると、スクールカウンセラーである自分が、学校の中で何をしたらよいのか、より明確に考えることが可能になりました。

外部の心理士として、私は、スクールカウンセラーに4つの介入について求めることが多くありました。一つは、教職員への理解を促すこと、二つ目は初期対応を行うこと、三つ目は学校という日常生活場面でのアセスメント、4つ目は外部機関との連携です。

1点目、教職員への理解を促すという点は、教職員に、トラウマ体験、トラウマ反応、二次被害等に関する心理教育を行うこと、及び実際の事例についてコンサルテーションを行うことを意味します。教職員のトラウマに関する理解が進むことで、子どもたちが回復するための環境が整えられます。また、学校場面で、二次被害という余計な傷つきを子どもが負うことも、未然に防ぐことができます。

2つ目の初期対応は、まず、学校生活で安全感と安心感を抱ける

ようにすること、子ども自身へ心理教育やリラクゼーションを行うこと、保護者に対しても同様にすることです。近年はサイコロジカルファーストエイドという概念も定着しつつありますが、学校現場で初期対応が行われることで、多くの子どもは落ち着いていくことができると考えられます。

3つめの、日常生活場面でのアセスメントですが、日常生活で、どのようにトラウマの影響が出ているかを見たて、それは学校現場に関わる人にしかできないことです。しかし、トラウマの影響を見立て、必要な支援を見極めるという非常に重要な対応である一方、何がトラウマ反応で、何はそうではないのか、というトラウマ反応に関する詳細で具体的な知識や視点がなければ、トラウマ反応を見逃してしまうことや、誤って捉えてしまうことも起きかねません。

4つめの外部機関との連携ですが、ここまで述べたように、学校現場に関わる人にしかできない初期対応やアセスメントが存在する一方で、専門機関しか果たせない役割もあります。トラウマの影響でPTSDになった場合、不登校や成績低下、自傷行為や性的逸脱行動といった問題行動が起きた場合、こうした対応はトラウマの専門治療や精神科の介入が必要となります。また、刑事手続きや公判手続きが続いていた場合には、学校が直接、警察や検察、裁判所と連絡を取り合うことも可能ではありますが、民間の犯罪被害者支援団体等、そうした公的機関との連携や裁判支援に慣れている団体と学校が連携することも重要ではないでしょうか。

以上をまとめると、学校現場においてトラウマに関する知識や経験、技術を生かすとする、教員への心理教育とコンサルテーション、安心できる場所の確保、環境調整、関係機関との連携といった「環境へのかかわり」と、生徒や保護者に心理教育やリラクゼーションを行うと言った「直接のかかわり」の2つの観点が重要であると考えられます。

スクールカウンセラーをしている方々は、スクールカウンセラー以外の心理業務の経験も持っていらっしゃる方が多いと思います。そうしたとき、視点を転換し、「外部の心理士であった場合、スクールカウンセラーにどうしてほしいと考えるか」「スクールカウンセラーである自分は、何ができるか」という、多方向から自身の役割を見直してみることも一つの方法であると思われました。

シンポジウム当日は、これらの内容に、事例を含めて発表を致しました。

(2) 「SCに必要なこと」

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学

保健管理センター学生相談室

清水岳彦

(元横浜市・川崎市SC)

与えられた主題は「初めてスクールカウンセラーをする者が、業務に当たって必要なこと、求められること、心がけるべきこと」で、SC初心者が読んで「これはありがたい！」と感じられるような内容を書いてほしい、とのことであった。教科書を書くわけではないし、そもそも私は規格外れの人間なのでおよそ業界的には非常識なことを書くことになるかもしれないし、そういう意味では「ありがたい！」ことは書けないので、その点は留意してほしい。

SCは週1回任地へ赴くだけの存在である（市町村によって制度は異なるが）。学校にとっては“中”の人であると同時に“外”の人でもある。常にタイムリーであるわけではないので、なんでこんな事になっているのかと訝しい思いをすることもある。従って、学校で起こっていることに対して常に従属的である。大抵は最初から関わらないので、野球で言うセットアッパーの役目をするのがSCの役割だと認識している。問題は何回から登板しますか？、どうやってゲームを作りますか？である。

そういう意味で、我々は主体たり得ない。学校のことは学校で解決するのがもっとも良いと思うので、SCは基本的にしゃばることなく黒子に徹するのがもっとも良い立ち位置だと思う。それは自分の身を守ったり環境を整えるためにも必要なことだと考えていた。よく、丸投げされたが、投げ返してもいた。必要とあらば攻勢にも出た。もちろん気づかれないように（なかったと思う）。でも、そうすることによってSCは主体たり得る。いつの間にか主導権を握ることができる。

“従属的”，“黒子”，“学校のことは学校で”とか言うと、すぐに「学校の言いなりになれということか」と目くじらをお立てになる向きがあるが、ある意味その通りである。SCは教育委員会によって任命されているのであって、学校組織の「内部」で仕事をしている。我々の権限はその範疇の中で認められているのであって、カウンセラーの職務や規範はその範囲内でしか行使できないはずである。

これはSCにとってはある意味double bindな状況である。組織人としてのあり方とカウンセラーの職務や規範として考えられていることとの間には天と地ほどの開きがある。たとえば守秘義務である。これで、揉めるのはよく聞く話で、今でもしばしば耳にする。カウンセラーとしては正しいのだろうが、公人としてはきわめて不都合である。

まず、こうしたことが理解できないと学校でうまく立ち回れなくなるだろう。そのうち相手にされなくなり厄介払いされるのが落ちである。学校は基本的に余所者が嫌いらしい。

SCとして着任した限りは、学校にSCは必要だと思わせなければならない。そのためには、こちらへ投げてこられるありとあらゆることに応じなければならない。SCは何でもやります的な存在であるはずである。狭義に考えすぎである。

そして、それは共有されなければならない。そこは、学校である。みんなで、協調的に協働して事に当たろうとするとそこだからである。そうでないところもある。そこでは、協働しなければいけないところとだけ協働すればいい。要するに、空気を読んで行動できるかどうかが問題である。いま何を期待されているか、そして、どのように収めなければいけないか、それは誰のためか、もっともらしくかつ論理的に説明して見通しを述べられることが求められる。時にははったりや腹芸や寝技も駆使してみせなければならないだろう（ネタバレ注意！）。また、アカウントビリティも考慮しておくように。

いずれにしても、こいつは使えると思わせなければいけないのと同じである。SCは使ってもらわなければ意味がない仕事である。臨床々々と言っていると視野が狭くなる。

種を播いて耕して芽が出るまで手間暇かかるのである。いろんなことをした気がする。私たちは純然たるサービス業である。ユーザーは“児童・生徒”，“保護者”等、そして“学校”である。どこに重点を置くかはそれぞれであろうが、もっとも仕事をしやすくするためには学校とは仲良くしておく必要があると思う。なんにしても、顧客に損害を与えるようなことはしてはいけない。

誤解を生むようなところが多々あるかと思う。言い尽くしてもいいない。筆禍として認識されないことを希う。

(3) KSCA連絡先

メール：ksca@k48-sp.com google検索：KSCA